



見 て 楽 し く 学 ぶ

「尼崎の水道100年をめぐる」

AMAGASAKI

MIZÜ

CHRONICLE

Since 1918



尼崎市水道通水100周年記念誌



尼崎市公営企業局

協力：尼崎市立地域研究史料館

制作・印刷：株式会社廣濟堂



p02  
水道がない時代、  
尼崎の人々の暮らしは？



p07  
尼崎市水道のシンボルだった  
この建物は？



p08  
木製の水道管が発掘！  
どうして木だったの？



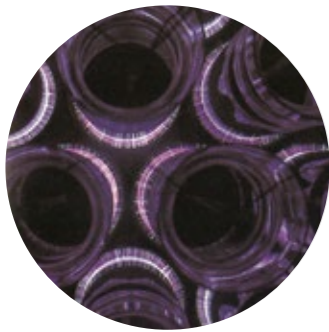
p10  
なぜ水源の変更を  
迫られたの？



p12  
淀川から水を  
ひくことの意味は？



p19  
このクルマは、  
何をしていたの？



p20  
日本初のオゾン処理設備は  
どうして誕生したの？



p22  
大規模な災害が起こったとき  
水道は大丈夫？







p24  
災害に備えてどんな  
対策をしているの？

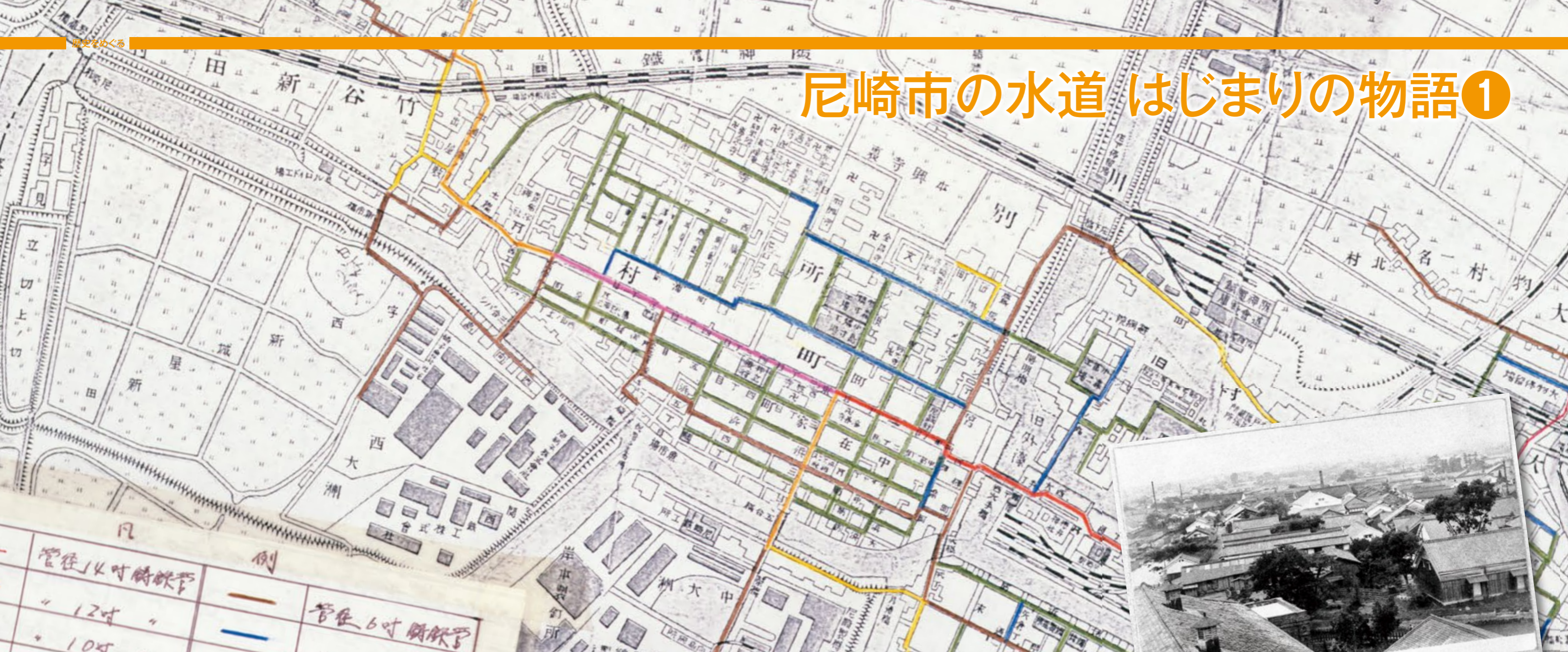


# 尼崎水道100年 不思議をめぐる

じゃ口をひねらなくても、手をかざすだけで水が出る時代。  
今では当たり前の存在となっている水道も、  
100年の歴史をたどれば不思議がいっぱいです。  
その誕生から今日まで、たくさんの困難を乗り越えてつないできた  
尼崎水道の100年をひも解いてみましょう。

- p02  **歴史をめぐる**  
尼崎市の水道 はじまりの物語／待望の工事がはじまった／尼崎百年の大計 いざ、淀川へ
- p14  **戦後・大震災をめぐる**  
戦災を乗り越えて／安全でおいしい水道水を追求して／大震災の教訓を活かす
- p26  **データで尼崎をめぐる**
- p28  **尼崎市の命の水を次の世代へつなげる**  
水道がつなぐみんなの笑顔／水の絵画・川柳展

# 尼崎市の水道 はじまりの物語①



▲ 創設時の管網図

水道ができるまでの尼崎では、市内に良質な水が少なく、本興寺の井戸などから汲んだ水を売る水屋さんがいました。



り、干潮時に川の水を汲んで飲用や炊事などに使用していました。また、わずかな良質な井戸から汲んだ水を桶で売り歩く「水屋さん」もいました。水を買う人は一部に限られ多くの人は、不良な井戸水や川の水を使用していたため伝染病流行の原因となっていました。

ただし、寺町一帯(現在の阪神尼崎駅周辺)の井戸水は良質でした。そのなかでも本興寺の井戸は深さ2m40cm(8尺)ほど、無色透明で量も豊富にあり、誰でも汲めるように開放されていました。コレラの流行時には川の水の使用が禁止されていたので、本興寺の井戸はコレラ流行時や干ばつなど、再三にわたって尼崎を襲った水危機を救ってきました。



明治時代～

## 水道ができる前の尼崎では どうやって水を確保していたのでしょうか。

水道ができる前の尼崎の人々は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

尼崎の町は、川から運ばれる砂などが堆積してできたごく狭い低湿な地域だったので、周囲に堤防を作り川の水や海水の浸入を防いでいました。当時、水を得る手段としては井戸が一般的でした。しかし、堤防に囲まれた地域の井戸の多くは塩分を多く含むため、飲用には適しませんでした。明治36年(1903)の資料(井水検査成績)では、尼崎にあった井戸総数1632のうち、飲用に適していたのは、わずか27と言う記録も残っています。では、どうやって飲み水を確保していたのでしょうか？

手作りの手桶にきれいな砂を入れて井戸水をろ過した



# 尼崎市の水道 はじまりの物語②



5



3



4

1：阪神電気鉄道株式会社／尼崎町の内大物に在り、明治32年6月の創立。2：尼崎駅／町の中央部にあり、本州を横断して瀬戸内海と日本海とを連絡する阪鶴線の起点。3：大坂鐵工所尼崎工場／内大洲に在り、大正元年9月の創設。4：尼崎ガス株式会社／内別所にあり、明治45年5月の設立。5：旭硝子株式会社／内大洲に在り、明治40年9月の創業にして本邦に於ける板硝子製造の元祖。6：飲料水を確保するため幾度となく水道布設を計画しましたが、財政的な問題からなかなか実現せず、大正5年に市制が実施されると同時に水道布設を実現するための準備が進められました。



100年ほど前は、まだ井戸や川の水で生活していたなんて信じられないね。むしろ、たった100年で、市内一円全ての世帯に水が行き渡るようになったことを考えると先人の人たちの苦勞がしみじみと感じられます。



6



尼崎町役場

## まちの発展とともに 水道の普及は切実な願いになりました。

の確保は年々難しくなってきました。人口集中によってコレラ以外にも赤痢、腸チフスなどの水が原因とされる伝染病が流行し、慢性化しつつあったのです。

その根本的な防疫対策として、近代水道の布設が切実な願いとなったのです。

日本の近代水道は、明治20年(1887)に日本で初めて横浜市に完成しています。以後、国の補助政策と相まって、主要都市を中心に近代水道の布設が進んでいました。「尼崎にも水道を」という声は、年を追うごとに強くなってきました。

明治7年(1874)に官設鉄道が大阪・神戸間に開通し、現JR尼崎駅である神崎ステーションが開設されました。明治24年(1891)には現在のJR宝塚線の前身となる尼崎・伊丹間を結ぶ川辺馬車鉄道が開通し、さらに明治38年(1905)には阪神電気鉄道本線が開通しました。

交通網の整備により尼崎は阪神地域の中核として、近代的な大工場が進出するなど、早くから産業都市として栄えてきました。人口も明治40年(1907)には約2万人ほどでしたが、大正4年(1915)には約3万人になり、8年で1万人増加しました。

しかし、先に紹介したように尼崎には良質な井戸が少なく、飲料水となるきれいな水

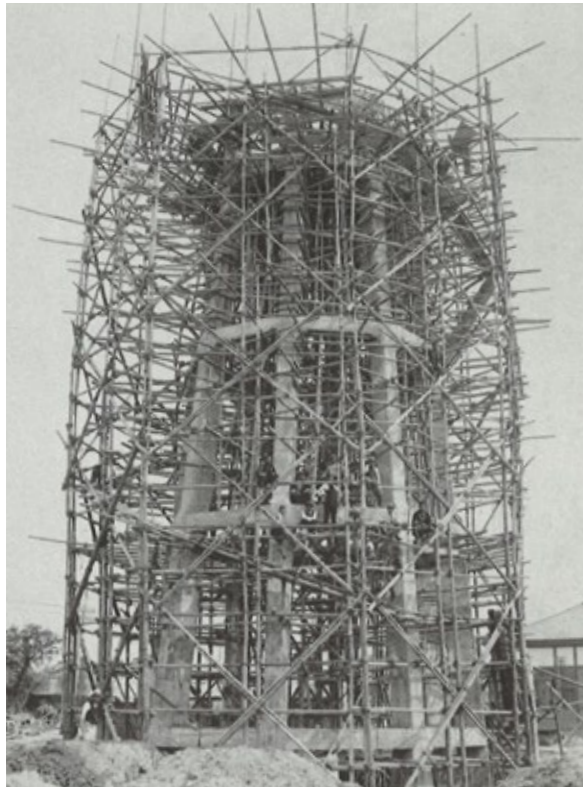


1

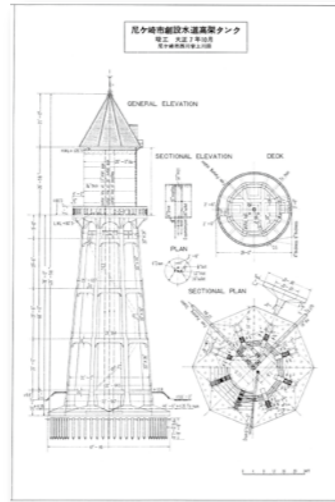


2

# 待望の工事がはじまった①



▲ 神崎水源地の西歐式配水塔。勾配がない平地の尼崎市で、自然流下により給水区域に配水するため、約36mの配水塔が建設された。



神崎浄水場建設前の風景

「じゃ口をひねれば水が使える」という、私たちの世代では当たり前となっている水道が今に至るまでには、たくさんの苦勞があったなんて想像もつかなかったな。当時はすぐにでも市内に水道をひかないと、日常生活に支障をきたすほど切迫した状況だったんだね。



## 大正5年(1916)～ 市制施行とともに、上水道の布設が決定。 実現に向けて大きな一歩を踏み出しました



なつていきました。こうした背景から大正5年(1916)に尼崎市制が施行され、国からの補助が受けられるようになったことで財政難から実現しなかつた上水道の布設が、市議会において緊急な案件として審議され、即日可決されました。

尼崎は、水道の布設に向けて大きな一歩を踏み出したのです。

「尼崎にも近代水道をつくらう」という動きは明治時代からあり、明治41年(1908)には、尼崎町が水道布設にかかる調査のための予算を計上し、京都帝国大学(現在の京都大学)の教授に委嘱して計画を作りました。この計画は給水人口を5万人とし、事業費が40万円(現在の価値にして約6100万円)でした。しかし、当時の町財政の規模では到底不可能な金額であつたため中止に。大正2年(1913)4月にも計画が持ち上がりましたが、町の財政難を理由に延期されました。

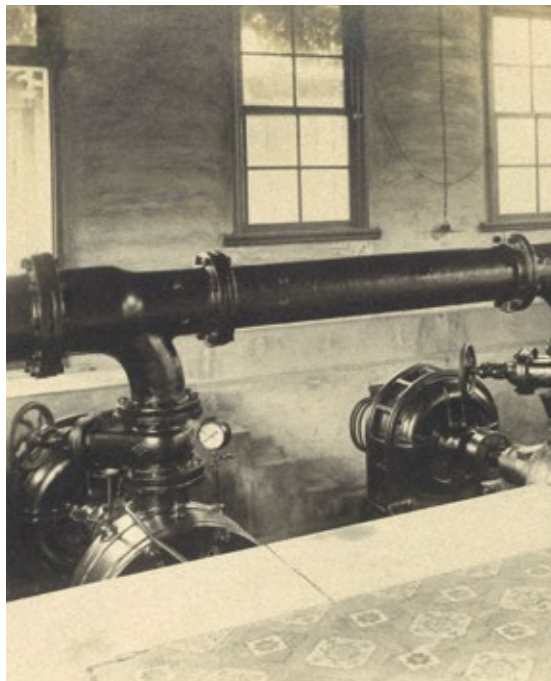
一方、このころから河川の逆潮とともに井戸水の塩水化が深刻化し「早く近代水道布設を」という声はさらに、大きく



# 待望の工事がはじまった②



神崎水源地全景(ろ過池増設後)



**物価の高騰で工事がピンチに。  
それでも諦めず、  
ついに水道が誕生しました。**

水道布設工事は、水量が豊富で水も清浄であった神崎川と藻川の合流点を取水地点として定め、給水人口5万人、事業予定額は43万1300円として計画され、工事が始まりました。それは第1次世界大戦(大正3年(1914)〜大正7年(1918))の最中のことでした。日本は欧州からの輸入が途絶え、輸出が増えたことから物価が急騰していました。

水道布設の主要な資材である鑄鉄管は1トンあたり95円だったものが、360円に暴騰したため、水道の布設を中止する自治体が全国で相次ぎました。

しかし、尼崎市の水事情は切迫しており、中止を許すような状況ではなかったため、古

資材の調達に悩まされながらも、予定より3か月ほど遅れただけで全工事が完成し、大正7年(1918)10月1日に通水が開始されました。こうして全国で35番目、兵庫県下では神戸市に次いで2番目の水道が誕生したのです。

通水から約1か月後の11月3日、待望の水道完成を祝い、神崎水源地(神崎浄水場)において盛大な竣工式を挙行しました。市内では提灯をつるし、花火を打ち上げて、水道の完成の喜びを市民みんなで分かち合いました。



大正7年11月4日神戸新聞



00